



《インタビュー》

「聞こえない世界」と 「聞こえる世界」の間で感じるもの

澁谷智子さん（成蹊大学文学部准教授）

成蹊大学文学部准教授の澁谷智子さんは、聞こえない親のもとに生まれた聞こえる子ども「コーダ CODA : Children Of Deaf Adults」の研究者として知られています。専門は比較文化研究・社会学。異文化理解という視点から聞こえない人たちの「ろう文化」に興味を抱き、さらに「ろう文化」と「聴文化」の間で成長していくコーダへと関心を広げました。2009年には、9年間にわたる当事者の聞き取り調査の成果として『コーダの世界』を上梓されています。

コーダが語る家庭内と社会との感覚のズレは、この世界に視覚言語である「手話の文化」と音声言語である「声の文化」があることを浮かび上がらせます。音声言語が圧倒的多数派であるこの社会で両者を文化として意識するのは難しく、導き手となる可能性を秘めたコーダの存在は貴重です。日本のコーダ研究の第一人者である澁谷さんにお話をうかがいました。

（聞き手：日本子ども学会事務局長・木下 真）

「ろう文化宣言」で手話の世界観が一変

——澁谷さんは、もともとどうして、「ろう文化」や手話の世界に関心をもたれたのですか。まず、そこからお伺いさせてください。

澁谷：私はクリスチャンで、小さい頃に通っていた教会に、難聴者とうろう者の方がいらしたのです。そこに手話通訳者もいて、毎週日曜日には通訳の方が手を動かすのを見ていました。教会に手話サークルができたとき、妹と私は難聴者の方に誘っていただき、そこで手話を学ぶようになりました。小学生だったので、周りの大人たちよりも単語の覚えが早く、ほめられるとうれしくなって一生懸命勉強しました。その後しばらく手話のことは忘れていたのですが、大学で卒論を書かなければならない時期に手話ドラマが流行り、手話をテーマにしようと考えたのです。そのことを教会に来ていたろう者の方に伝えたら、「ろう文化宣言」をテーマにした雑誌『現代思想』の臨時増刊号をくださいました。その雑誌との出会いがきっかけです。

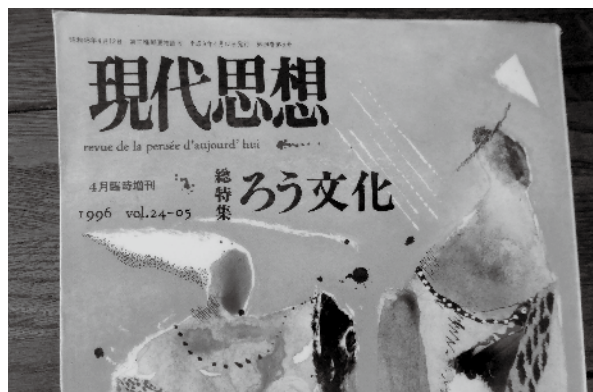
——その雑誌のどんな内容に刺激を受けたのですか。

澁谷：私はそれまで手話は日本語の付属物だと思い込んでいました。いま思えば不遜なのですが、手話を勉強するのは、障害者のためのボランティアだと考えていました。手話は日本語の一部の単語を手の動きに置き換えたものだと思っていたのですが、その雑誌には、

日本手話は日本語とはまったく異なる独立した言語であると書いてあって、大変驚きました。

ろう者を耳の聞こえない障害者として見るのではなく、別の言語をもつ文化的少数者として見るという視点の転換でした。手話は言語学的に完全な言語であることが証明されたと書かれていたことにも、とても新しさを感じました。

たまたまその頃にアメリカに留学する機会を得たので、アメリカ手話を数か月学んで、渡米したのですが、そこでデフコミュニティに接したのは大きな経験でした。大学においても、ろう学生が手話で学ぶ権利が尊重されていて、手話は本当に言語であり、文化なのだと実感して日本に帰ってくるようになりました。



「ろう文化」という視点を世に広めた特集雑誌（1996年4月刊行）

顔の表情が文法として機能する

——澁谷さんが小学生のときに学んだ手話と、ろう者が使う日本手話とは何が違ったのですか。

澁谷：私も最初は日本手話が何なのかかわかっていませんでした。リズムや語順が違っていることや、顔の表情が文法として機能していることなど、まったく理解していませんでした。

——顔の表情が、文法として機能している？

澁谷：はい。聴者が手話を使うと、ろう者から表情が足りない、よく言われます。すると、手話学習者は、思いきり悲しい顔や嬉しい顔をするのですが、ろう者からすると、それは大げさな表情になってしまったりします。そうではなくて、ろう者が使う日本手話は、手指の形だけではなく、眉の上げ下げ、口の形、あごの引き具合、うなずきなども含めて、さまざまな視覚要素が文法として機能しているのです。もちろん感情を表す表情もあるのですが、それとは別に文を構成するための表情があるのです。

たとえば、「食べる」という手話にあごの突き出しを加えると、「食べて」という＜命令文＞になり、眉



「勉強する」という手話



口元を真一文字にすると「一生懸命勉強する」に

を上げて、あごを引くと、「食べたの？」という＜疑問文＞になります。通常にあごの位置や目の状態ならば、「食べる」というただの＜肯定文＞です。

他にも「勉強する」という手話の動詞に、口を真一文字にすると「一生懸命勉強する」という意味をもち、口を半開きにすると「いいかげんに勉強する」という意味になるなど、口の動きが副詞的に機能することもあります。

——そのような日本手話を、ろう者ではない人間はどのようにして学ぶのですか。

澁谷：日本手話を専門に教えている手話教室では、日本語を使わないで初めから手話だけで学ぶナチュラルアプローチというやり方をしています。日本語を介さないで、声なしで、聞こえない先生から直接に学ぶのです。「何色？」「家族は何人？」「家を出たのは何時？」というような簡単な話題を手話だけで学ぶところからスタートします。

私はもともとナチュラルアプローチではない、ふつうの手話サークルに行っていたのですが、なかなか上達しませんでした。それは、頭の中で日本語を話しながら、それを手話に直していたからだと思います。日本語の音声の抑揚につられて手を動かしていて、手話らしい一連の流れや間、リズムができていなかった。たぶん日本語にあまり慣れていない外国人の「アリガト、ゴザイマース」のような響きになっていたのではないかと思います。

——それでも意味は通じますよね。でも、ネイティブの手話はもっと違っているということですね。

澁谷：私たちが外国人と話すときに、片言の外国語でも向こうが察して理解してくれるじゃないですか。発音や文法が多少変であってもかまわない。しかし、込み入った話を始めようとする、それでは通じなくなります。たとえば、表情の文法が表現されない手話だと、「行く」なのか、「行くの？」なのかがあいまいで話がずれてしまったりする。でも、そういうことがわかってくると、視覚的な表現の複雑さや豊かさに気づかされて、手話の世界がますますおもしろくなっていきます。

風景を動画として記憶する

——聴者は、ろう者がコミュニケーションしている世界を、音のない静かなイメージで想像しがちですが、ろう者や、聞こえない親のもとに生まれた聞こえる子ども「コーダ」にとっては、視覚表現があふれるにぎやかな世界なのかもしれませんね。

澁谷：視覚的な表現って、情報量が多いのです。例えば、交通事故の状況を手話で表せば、どの方向から、どん

なスピードで、どんなふうにつぶかったのかが一目瞭然とわかります。交通事故の様子を、あれこれ音声で説明を加えていくのに比べると、はるかに多くの情報を一度に相手に伝えることができます。

手話を巧みに使える人たちと付き合っていると、“図像性”について考えさせられることがあります。聞こえる聞こえないにかかわらず、小さいときから手話を使ってきた人の語りは、図像性をふんだんに活かしていて、わかりやすく、話に引き込まれるのです。落語の名人の話芸みたいで、内容がわかっているのに、何度でも見たいなと思わせるものがあります。

私のように幼い頃に本格的な手話を習ったこともなく、ろう学校に通った経験もなく、やりとりはすべて音声で、思考をすべて日本語で積み重ねてきた人間には、なかなか真似のできないことです。

——多分、脳の情報処理の仕組みが違っているということですね。

澁谷：私はそれを科学的に裏づけることはできませんが、感覚的に違っているなと思うことはあります。あるコーダは、「電車に乗り遅れたという状況を手話で表してみよう」と言うので、電車の止まっている様子、走る人、閉まるドア、「あーあ」といった顔などを、具体的に表現してくれました。まるで映像編集して動画を作るように、そうした表現がすぐできるのです。別のコーダは、自分の見た韓流ドラマの恋愛シーンを、恋人同士が近づく様子から、思いを語る際の“溜めの表情”の描写しまで、臨場感たっぷりに再現してくれました。もちろんコーダの誰もがというわけではないのですが、私の知り合いのコーダにはそういうことができる人が何人もいます。

コーダの記憶の仕方も映像によるものが多いのかなという気がします。私たちも過去は何らかの像として思い出しますが、ぼんやりしていますし、かならずしも動画はなくて、静止画だったりもすると思います。しかし、コーダは動画で記憶したり、思考したりできるようです。目で風景を吸い取っていくような感じで、細部まであざやかに記憶するところがあるような気がします。動体視力も良いようで、空中に書いた文字の空書きの軌跡が、残像のように見えるという人もいます。

——視覚障害者が聴覚に鋭敏になるように、ろう者は視覚に鋭敏になるということですね。しかし、聞こえるコーダにも同じような感覚がある人がいるというのは、おもしろいですね。

澁谷：コーダは、ろうの親と暮らしていますから、視覚を大切にするコミュニケーションの仕方は自然と身につけていくことになります。

たとえば、やりとりの際には、コーダは相手の顔を

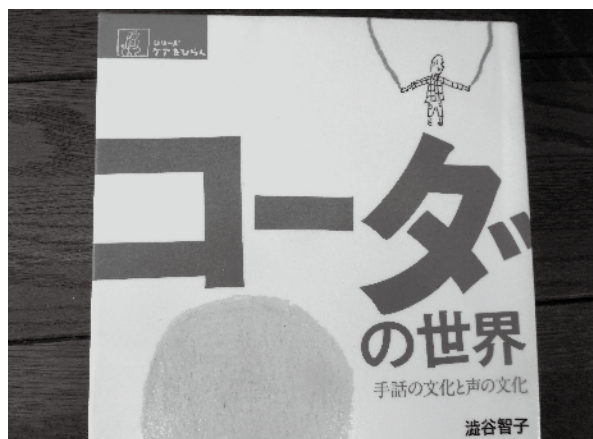
しっかりと見るのが習慣になります。聴者であれば、視線を合わせなくても、ときには背中を向け合っているけど、話をするのは可能ですが、それでは聞こえない親とのコミュニケーションは成立しません。つねに視線を合わせ、表情を確認しながら話すことになります。そして、相手の言っていることに、その都度きちんとうなずいて、理解していることを示します。

他にも、家の中では、部屋の扉は開け放しにしておくことが多いと言います。聞こえている人は閉めていても、気配でわかりますが、ろう者の場合はそれがないので、個室であってもドアは開けておくようにするのです。ろう者とのコミュニケーションは、視覚的な表現を共有しながら行われるので、互いが見えているということが、ろうの世界では大切にされます。コーダも子どものうちはそれに従っています。

コーダの視覚的な認知能力の高さは、幼少の頃から視覚を通じて親とコミュニケーションを取ってきたことで培われたものではないかと思います。コーダの中には手話が苦手な人も少なくないのですが、たとえ手話ができないと本人が思っているとしても、その視覚表現はコーダの認知の仕方と深く結びついているような気がします。

「ろう文化」と「聴文化」の間での葛藤

——コーダは、ろう者と共通した“視覚重視”の世界を経験しているということですね。貴重な存在ですね。
澁谷：そう思います。でも、コーダは成長するにつれ、ろう者のやり方と、聞こえる人のやり方の違いに気づき、その間で戸惑うことがあります。幼い頃には、親が聞こえなくても、手話を使っているけど、そんなものかなと思いますけど、小学校に上がってしばらくすると、家の中の“当たり前”がほかの家とは違うと気づかされることになり、不安を覚えることがあるのです。



『コーダの世界』(医学書院 2009年)。コーダの魅力と葛藤が綴られている

障害のある親のもとに生まれたということから特別視されたり同情されたりすることもありますし、思春期になると、自分自身、他の同世代と違うところがあると感じたりします。みんなと同じであることや普通であることが大切に思えてくる時期ですから、家庭と社会との生活習慣や感覚のズレを気にすることも少なくありません。

——ズレというのは、具体的にはどんなことですか。

澁谷：たとえば、コードは人と話すときに、相手の顔をじっと見るのが普通です。ろうの親に対しては、視線をそらさないことが、話をちゃんと聞いているということになるからです。しかし、その感覚で一般の聞こえる人と接すると、相手はその長すぎる視線に違和感を覚え、誤解してしまうことがあります。コードにしてみれば、普通に見ていただけなのに、「俺のことが好きなのかな？」と勘違いされたり、「あんた今ガンつけたでしょ」と言われてしまったりするそうです。

また、ろうの世界はストレートな物言いが良しとされるので、その感覚で会話して、驚かれることもあるようです。友人に「この髪似合う？」と聞かれて、「似合ってない。前のほうがよかった」と素直に感想を言って怒られたという人もいました。

他にも、ろう者の世界では、相手の視野から消えるときには、「トイレに行くね」「飲み物を取ってくるね」などと、理由を告げるのが暗黙のルールになっています。視覚を大切にする「ろう文化」では、その場の人の行き先をみんなが知っているようにすることがマナーなのです。その感覚で、たとえば職場でいちいち「トイレ行ってきます」と言うのと、「若い娘さんが“トイレに行く”ってわざわざ言うなんて、変わった子だな」と思われたりすることもあると言います。

——海外帰国子女の悩みと似ていますね。生活習慣の違いによるカルチャーギャップですね。

澁谷：本当にそうです。コードは「ろう文化」と「聴文化」という、二つの文化の間に立たされます。でも、外国の場合と違って、それを「文化」と認識しづらいところが、コードの置かれた状況であると思います。学校に通い、聞こえる人との交流が深まってくると、自分の家でのやり方を、「うちの変なのかな」と思ってしまったりもします。また、コードの中には、日本語に比べて手話の力をレベルアップさせることができず、親子間でスムーズにコミュニケーションできない状況に陥ってしまう人もいます。思春期には、手話を使うのを止めてしまったり、親と距離を置いてしまったりするコードもいます。

——親子関係まで変わってしまうというのは、辛いですね。

澁谷：もともとコードは、自分の親が他の親とは違う

立ち振る舞いをすることに恥ずかしさを感じていたり、家での当たり前が、外では当たり前ではないかもしれないという不安感をもっていますから、いわゆる反抗期とも重なって、思春期には親に対してイライラを募らせることが多くなります。親との身体的・経験的・言語的な違いに加え、「親と思うように話ができない」というコミュニケーション上の悩みは、ときにコードを孤独な気持ちにさせることになります。

そういうマイナスの経験をうまくやりすごして、親に対する愛情や二つの文化の間で経験した葛藤を価値あるものと思えるためには、少し時間が必要とされるようです。

コードに架け橋となることを期待する

——思春期のコードをうまく支えることはできないのでしょうか。

澁谷：思春期のコードが「自分だけがなぜ」と、一人で悩まないようにするためには、親が小さい頃から年齢の近いコード同士の付き合いを作っておいて、その付き合いを思春期まで継続させてあげることが大切なのではないかと思っています。同じ思いをしている仲間と共に感してもらうことで、悩みはずいぶん軽減すると思うからです。また、ろう者の世界をよくわかっている大人や先輩のコードから、聞こえる人と聞こえない人とのやりとりのズレの構造を説明してもらおうと、自分の経験してきたことの意味をより深く掘り下げて考えられるようになると思います。

——コードは両方の文化の架け橋にはなれないのでしょうか。

澁谷：コードはろう者との生活体験があるわけですから、架け橋となれる可能性は十分にもっていると思います。

コードは子どもの頃から、親と周囲の大人との間に立って通訳をする役割をしばしば負わされます。能力を超える要求をされれば、負担に感じるときもありますが、祖母に電話で「お正月、ママは何日に帰るって言うてる」と親のメッセージを伝えたり、ファミリーレストランで店員に「スパゲティ3つお願いします」と注文を伝えたりするのは、自分が役に立っているという自己肯定感につながっていた面もあるようです。

そのため、コードの中には、大人になってから、本格的に手話を学び直して、両者の間に立ちたいと考える人もいます。そういう人は、親のことだけではなく、親以外のろう者のことも知ろうとし始めます。そうして改めて親と向き合うことになって、親がかつて何を考えていたのかを知り、親子関係のきずなを結び直すような場合もあります。

コーダは、「聞こえない人」の世界と、「聞こえる人」の世界の、両方につながっている存在です。「聞こえない人」にとっての当たり前と、「聞こえる人」にとっての当たり前が違っていることに彼らは気がついていますが、「聞こえる人」の多くは、そもそもそこに「違い」があることにさえ気づいてないかもしれません。聴者は人に何か伝わるのは当たり前だと思っていますが、ろう者やコーダは、伝わらないことの切なさや口惜しさも、伝わったことの喜びもよくわかっています。私は手話だけではなく、そのことも含めて、「ろう文化」だと思っています。

聴者にとって、ろう者の世界は本当のところはよくわからないのだと思います。でも、コーダの話を聞くことで、「聞こえない人」の世界には「聞こえない人」のコミュニティとそこで育まれた文化があり、それは豊かなものなのだというを感じるきっかけをもらえるのではないかと思います。

(2018年12月11日／成蹊大学文学部・澁谷智子研究室にて)

〈プロフィール〉

澁谷智子（しぶや・ともこ）

成蹊大学文学部准教授。1974年生まれ。専門は比較文化研究・社会学。東京大学教養学部卒業後、ロンドン大学ゴールドスミス校大学院社会学部 Communication, Culture & Society 学科修士課程、東京大学大学院総合文化研究科修士課程・博士課程で学ぶ。学術博士。日本学術振興会特別研究員、埼玉県立大学・立教大学非常勤講師などを経て、現職。著書に『コーダの世界－手話の文化と声の文化』（医学書院）、『ヤングケアラー－介護を担う子ども・若者の現実』（中公新書）など。